

国際協働学習

iEARNレポート

2025年度

特定非営利活動法人グローバルプロジェクト推進機構 (JEARN)

2026年6月1日発行 ISSN 2434-0049 (オンライン)

国際協働学習iEARNレポート（2025） 目次

番	題 名	所 属	報告者代表氏名	頁
	プロジェクト実践編			1
1	The Olympics & Paralympics in Action (TOPA) Project －開催国の現地校訪問の機会を得たミラノコルティナ2026－	文京学院大学 TOPA Project	滝沢 麻由美	2
	高等学校・高等専門学校実践編			4
2	探求学習・"Girl Rising Project"の実践 －「女性の人権」と「質の高い教育」を目指して－	啓明学園 中学校高等学校 Girl Rising Project	関根 真理	5
3	世代間のオンライン異文化間協働学習に見る学習者の相互作用 －高専学生と台湾の中学生との平和教育の実践－	仙台高等専門学校	若生 深雪	10
	大学実践編（Youth Project）			14
4	Youth Project 実践報告 －韓国・台湾とのCultural Package Exchange－	青山学院大学	岡田 麻唯 栗田 智子 勝又 恵理子	15
5	奥能登の過疎地域におけるICTを活用した 国際協働学習の実践と教育的意義 －地域愛と世界への関心の促進を目指して－	金沢星稜大学	高野 寿菜 清水 和久	17
6	日本と台湾との国際協働学習を実施した教員の変容 －サポーターとしての大学生の働きかけを通して－	金沢星稜大学	清水 和久	21
	その他のプロジェクト			25
7	ANNE FRANK Meet and Learn	iEARN/JEARN	高木 洋子	26

<https://jearn.jp/Journal/journal.html>

ISSN 2434-0049

プロジェクト実践編

The Olympics & Paralympics in Action (TOPA) Project

—開催国の現地校訪問の機会を得たミラノコルティナ 2026—

文京学院大学 滝沢麻由美

要旨 東京 2020 開催決定をきっかけに 2019 年からスタートしたこのプロジェクトは、その後北京 2022、パリ 2024 を経て、今回はミラノコルティナ 2026 について活動をおこなった。スポーツを通しての平和の祭典であるはずの五輪・パラ大会は、歴史的にも現実的にも世界情勢を色濃く反映し続けている。そんな中でも今回初めてファシリテーターが大会期間中に開催国現地校でワークショップを行なう機会を得て、プロジェクト実践により幅と深みを増すことができた。

キーワード 五輪・パラリンピック教育 オリンピック休戦 現地校訪問 ワークショップ

1. はじめに

このプロジェクトは、2018 年のアイアーン国際大会（ヴァージニア、米国）で、東京 2020 へ向けて新プロジェクト発足を提案するポスター発表を経て承認され、2019 年にスタートした（2019~2023 年の共同ファシリテーターは長谷川早百合さん）。その後 2020~2021 年のコロナ禍での延期と開催を経て北京 2022 へと続き、今回はコロナ禍終息後初めて開催されたパリ 2024 に向けての活動がおこなわれた。

本報告では、今年 2~3 月に開催されたミラノコルティナ 2026 について、毎回恒例の五輪開催前の参加校によるオンライン発表交流会（TOPA Global Exhibition / TGE）と、その後の五輪期間中に筆者がプロジェクト・ファシリテーターとしてイタリアの参加校を現地訪問しておこなったワークショップについて述べる。

また、今回の世界情勢としては、北京 2022 パラ大会直前に起きたウクライナ侵攻がまだ続いているだけでなく、4 年後の今回もまた同じタイミングで米国とイスラエルがイランへの攻撃を開始した。2022 年以来、本プロジェクトでは、特に古代オリンピックの起源から現代に引き継がれている「オリンピック休戦（Olympic Truce）」の理念を共に学ぶことに重きを置いてきているが、筆者はパリ 2024 に続き今回もミラノでの開会式に参加し、万国旗の下に集った世界中の人々の笑顔と歓喜の中で、あらためて五輪・パラ大会の意義はスポーツを通してのこの国際連携・協働にあると実感した。困難な状況でも政治的な理由に左右されないよう努力し、今後も志を同じくする各国の教師たちと草の根レベルでの連帯を若い世代の生徒達のために続けていくことへの思いが年々強くなっている。

2. 目的と方法

2-1 目的

TOPA が目標とする SDGs は次の 3 つである。
—No.3 「すべての人に健康と福祉を」 No.10 「人や国の不平等をなくそう」 No.17 「パートナーシップで目標を達成しよう」—これに沿って五輪・パラリンピックの理念、特にその価値（Olympic & Paralympic Values）」と「フェアプレー」、「オリンピック休戦」について共に学ぶことを通じて、友情、励まし の精神、多様性の中での連帯（Unity in Diversity）を育んでいくことを目指している。

2-2 方法

1) 実施計画案

対象：K~12（幼~高 3）

プロジェクトの活動時間：授業 3 コマ以上

- ・自己紹介、各校のスポーツの取り組み、自国の五輪・パラニュースなどの投稿。
- ・五輪・パラリンピックの価値を学び、自分の好きな価値のこぼれを表現していると思う自国の選手などをその理由とともに選び、コラージュや発表スライド等の成果物として作成。

・TOPA Global Exhibition (TGE) 2026

毎回大会前に教師と中高生、JEARN Youth 等が参加してのオンライン交流発表会の実施。

2) 内容項目

- ・TGE 2026 で「オリンピック休戦」についての全体ワークショップを今回はより深い内容でおこない、意見を交わし協働成果物を作成する。
- ・イタリアの現地ミドルスクールに筆者が五輪期間中に訪問し、ワークショップをおこなう。

3) 評価方法

TGE 2026 全体とイタリアでの 2 つのワークショップを「内容言語統合型学習(CLIL)」として、その 4 Cs (Content, Communication,

Cognition, Community / Culture) のフレームワークを用いて活動案を作成。そしてその4Cs観点に基づく reflection form (4件法と自由記述)を作成し、発表会やワークショップ終了後に参加教師と生徒に記入してもらう。この結果と考察の詳細は、別の機会で後日発表する。

3. 活動内容・研究内容

3-1 TOPA Global Exhibition (TGE) 2026
 日時：2026年1月31日(土) 22:00-24:00 (JST)
 参加国：ベラルーシ、イタリア、ネパール、アメリカ、日本 (JEARN Youth：坂本ひとみ先生と学生らによる発表とMC)、その他(台湾、豪州)からの約40名の教師と生徒。

<当日プログラム>

- 1) Opening ~ Hello from around the World
 毎回恒例の各国語でのあいさつのやり取り
- 2) Milano Cortina 2026 Overview from Italy
 開催地ミラノから Francesca Costa 先生(サクロ・クオーレ・カトリック大学)とイタリアの参加校による現地の様子や大会の紹介。
- 3) Youth session ~ My favorite athletes and Olympic & Paralympic Values
 各国の生徒達によるクイズも入れたオリパラの価値と選手紹介のインタラクティブな発表。
- 4) Workshop ~ Olympic Truce
 今回は特に IOC 公式サイトにある Olympic Truce の記事に基づき“Dialogue”(対話)と“Reconciliation”(和解)をキーワードとして、Tokyo 2020 以来何回かおこなってきた Peace Orizuru Activity の紹介だけでなく、さらに Sadako Peace Cranes Project 日本ディレクターの作間和子先生の協力のもと前述のキーワードについての日米間のエピソードを通して、より深く参加者に働きかけることを試み、その後の breakout rooms での話し合いにつなげた。
- 5) Closing ~ Let's celebrate "Unity in Diversity" at Milano Cortina 2026!
 イタリア校からの大会公式ソングの紹介と共に、皆で平和で安全な大会を願った(写真1)。



写真1 TGE 2026での各国からの参加者

3-2 Workshops at Scuola Secondaria Rita Levi-Montalcini (Italy)

日時：2026年2月11-12日(木、金) (写真2)



写真2 学校訪問の様子(出入口に日本国旗も)

1日目: Olympic Truce & Peace Orizuru

TGE 2026での内容を発展、またツルを皆で折り五輪開会式のスローガンだった Harmony と Peace のための「価値」のこぼれを各自添え、クラスごとにコラージュを作成した(写真3)。



写真3 Peace Orizuru Collages と授業の様子

2日目: Secrets of Para Sports

パラの「価値」の Equality や、Inclusion を中心に、Classification (障害の程度によるクラス分け) 詳細を紹介し、実際に障害者との協働を想定した team building のためのグループ・アクティビティをおこなった(写真3)。

4. 成果と課題

○成果

・毎回の TGE 同様、教師生徒ともに五輪・パラを通して様々な国の参加者とリアルタイムで交流することに大きな意義を感じている。また教師間は協働だけでなく共感や友情も深めている。

・今回初めて大会期間中に開催国現地校でのワークショップが実現し、今までの知識や経験から選りすぐった内容が届けられるよう最大限に努力をしたが、現地での反応も良く安堵した。担当の Francesca Cino 先生を始め、学校をあげての取り組みと温かい受入れに改めて感謝する。

○課題

・TGE 2026では breakout rooms session をより長く取りたいという希望が多かったため、次回は全体の時間配分をより工夫する必要がある。

・次回の LA 2028 は夏季大会のため、特に開催国アメリカ現地校との協働と TGE 開催時期(6月)設定などについて検討が必要である。

高等学校・高等専門学校 実践編



探求学習 ・ “Girl Rising Project” の実践

— 「女性の人権」と「質の高い教育」を目指して—

啓明学園中学校高等学校 関根 真理

持続可能な開発目標（SDGs）には、「目標4：質の高い教育」と「目標5：ジェンダー平等」が含まれている。世界のすべての女子が質の高い教育を受けられるようになれば、彼女たちの人生だけでなく、周囲の人々や地域社会にも良い変化が生まれ、それが社会全体を変えていく原動力となる。このプロジェクトでは、Girl Rising のドキュメンタリー動画を通して、開発途上国で現在も続く課題を知り、その解決策を他国の生徒と共に考え、協働しながら行動できる力を育むことを目指している。

質の高い教育 女性の人権 国際協働学習 課題発見 課題解決

1. はじめに

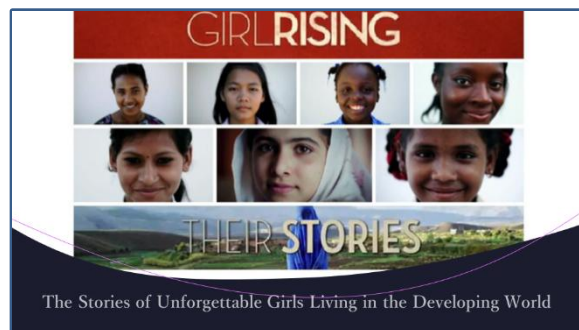
Girl Rising プロジェクトを 2013 年に開始した背景には、筆者がマララ・ユスフザイ氏の勇気ある行動に感銘を受け、女子教育の重要性について生徒と共に考える協働学習の実践を行いたいと考えたことがある。その思いを iEARN の Teachers Forum に投稿したことを契機として、本プロジェクトは開始された。

2. 目的と方法

Girl Rising プロジェクトは、開発途上国において女子が置かれている社会的・文化的背景を理解するとともに、その中で教育を受けた女子がどのように自己変容し、周囲に肯定的な影響を与えていくのかを学ぶことを目的とする。さらに、他国の生徒との協働学習を通して、自国および他国に存在するジェンダー問題を発見し、その課題解決に向けて主体的に行動する力を育成することを目指している。

本プロジェクトへの参加にあたっては、まず YouTube 上で公開されている Girl Rising の9か国（カンボジア、ハイチ、ネパール、エジプト、エチオピア、インド、ペルー、シエラレオネ、アフガニスタン）および Brave Girl（ケニア難民キャンプ）に登場する少女たちの教材映像を視聴する。どの国の映像を、どの程度の期間をかけて学習するかについては、担当教員の判断に委ねられている。各国の映像は、

児童労働、児童婚、貧困、難民問題など、扱うテーマや課題が異なるため、教員は事前に内容を確認し、生徒の発達段階や学校の地域性を考慮した上で適切なテーマを選択する必要がある。授業では、生徒が動画を視聴し、オンラインフォーラムに提示された質問に答える活動から学習を開始する。



3. 活動内容

活動内容として、勤務校における高校3年生の選択授業「国際理解」での授業実践を紹介する。2025年度は、29名の生徒が本プロジェクトに参加した。本年度も前年度と同様に、海外在住経験のある生徒に加え、外国籍の生徒が半数以上を占めていた。そのため、授業は英語と日本語を併用したバイリンガル形式で実施した。その結果、他国の生徒とのコミュニケーションも円滑に行われるようになった。

◆ホット・シーティング

本授業では、演劇的手法の一つである「ホ

2025 年度 JEARN 活動報告集

ット・シーティング」を用い、動画の主人公の境遇をより深く理解できるよう工夫している。ホット・シーティングとは、一人または複数の生徒が登場人物になりきって教室前方の「ホット・シート」と呼ばれる席に座り、他の生徒からの質問に答える活動である。

この手法を用いることで、ホット・シートに座った生徒は、与えられた役の立場に立って思考し、出来事を自分自身の経験として捉えながら回答することになる。一方、質問する側の生徒も、より学びを深めるためにはどのような問いが適切であるかを考えながら質問を構成するため、主体的な学習が促される。

さらに、複数の生徒による異なる視点や解釈が共有されることで、登場人物の状況に対する理解が多面的に深まり、クラス全体の視野を広げる効果が期待できる。

◆グループポエム

学習内容を表現するもう一つの手法として、「グループポエム」の活動を取り入れている。本活動では、生徒を5~6人のグループに分け、英語と日本語を併用しながら協力して一つの英語のポエムを創作する。今年度も5グループに分かれてポエムを作成し、その内容を他者に伝えることを目的として発表準備を行った。



発表に際しては、単に作品を読み上げるのではなく、表現方法に工夫を加えるよう指示している。今年度も、他国の生徒との共有を意識し、発表の様子を動画として記録した。生徒が創作したポエムの一つを紹介する。

Freedom

Mummy, why did you sell me?

Didn't you love me?

What's the matter of living if my family left me outside?

No freedom

No education

No joy

If I don't have skills, I will be killed.

Why do I have to suffer more than other children?

My frineds are off at school all day learning cool thing but I?

No way I learn how to fold your pants.

And do the quiet unhappy dance.

Don't leave me alone.

I'm not different from you.

We have same blood.

Independence for work.

Work for independence.

Flick, Flick, Flick,

I grow smarter.

The words fill my brain

And make me stronder.

I was not born to be a slave.

I was born to be free and live my own life.

これらの手法を通して学習を深めた後、生徒は **Girl Rising** プロジェクトのフォーラムに自らの感想や意見を投稿した。さらに、他国の生徒の投稿に対してコメントや質問を行うことで、相互的な対話を通じた理解の深化が図られた。

◆5カ国の協働学習

本年度は、アゼルバイジャン、アルゼンチン、インド、ジョージア、日本の5カ国の高校生が参加し、国際協働学習を実施した。2月より、参加を希望する教員に呼びかけ、各校で準備を開始した。

交流活動では、昨年度に引き続き **Padlet** を活用し、生徒による自己紹介を行った。教員を含む計70名が参加し、ロールモデル（尊敬

2025年度 JEARN 活動報告集

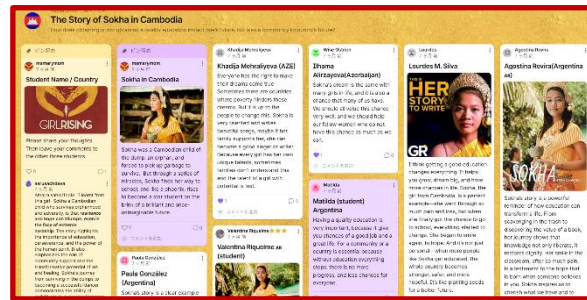
する人物)、将来の夢、挑戦してみたい活動などを共有した。

投稿内容からは、多くの生徒が自分の家族をロールモデルとして挙げていることが確認できた。また、将来的に他者のために平和活動に携わりたいと述べる生徒も多く、国や地域を超えて共通する価値観が見られた点が興味深い。

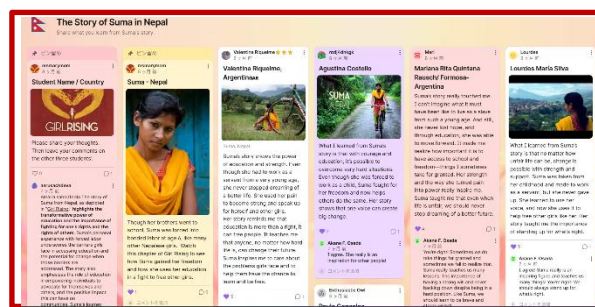


《自己紹介のパレット》

国際協働学習の一環として、参加生徒全員が *Girl Rising* に収録されているカンボジアの少女 Sokha とネパールの少女 Suma のストーリーを視聴し、学んだ内容を Padlet 上で共有した。



《カンボジアの少女 Sokha の感想》



《ネパールの少女 Suma の感想》

生徒たちは、映像を通して、開発途上国においては現在もなお、女性であることを理由に人権が侵害される文化や慣習が存在することを再認識した。また、こうした問題の背景には、保護者や地域の大人が十分な教育を受けていない環境が影響していることにも気づくことがで

きた。特にネパールの Suma のストーリーに対しては、多くの生徒が強い関心を示した。Suma の周囲には彼女を支えるソーシャルワーカーの存在があり、Suma 自身も逆境に屈することなく、自らの状況を変えるために行動し続けていた。生徒たちは、この姿から「勇気を持つこと」「行動することの重要性」を学び、困難な状況にあっても希望を失わずに前進する姿勢の大切さを実感していた。

◆国際会議オンライン会議の実施

7月12日(土)の日本時間午後9時より、協働学習に参加する5か国の高校生および教員が参加し、“Pathway to Equality: Youth Engagement with Girl Rising”をテーマとしたオンライン会議を開催した。

会議の冒頭では、事前に Padlet 上で共有した Sokha と Suma のストーリーに関する生徒の感想を全体で確認した。その後、各国の生徒が均等に混ざるように編成されたブレイクアウトルームに分かれ、各校で取り組んできた学習内容や、それぞれの国で課題となっている社会問題について意見交換を行った。

生徒たちは、異なる文化的背景を持つ仲間と対話することで、自国の課題を客観的に捉える視点を得るとともに、共通する問題意識や価値観を共有する機会となった。



《Zoom による6カ国オンライン会議》

今回のオンライン会議を通じて、生徒たちは国境を越えて高校生同士が共に学び、互いの考えを深める貴重な機会を得た。異なる文化的背景を持つ仲間と対話することで、自国の課題を客観的に捉える視点が養われるとともに、共通する問題意識を共有することができた。

2025 年度 JEARN 活動報告集

また、各国が抱える社会課題について議論する中で、生徒たちは「知ること」にとどまらず、課題解決に向けて実際に行動することの重要性を改めて実感した。本活動は、生徒一人ひとりが主体的に社会と向き合う姿勢を育む契機となった。

◆成果プロジェクト（動画作成）の実施

授業の最終成果として、今年度も例年同様に動画制作プロジェクトに取り組んだ。生徒たちは、授業を通して学んだ内容や自分たちができる行動を表現する手段として動画を制作し、約4分間の作品としてまとめた。各作品には、学習を通じて得た気づきや、視聴者に伝えたいメッセージが盛り込まれている。

今年度は、*Girl Rising* に登場する少女たちが暮らす「カンボジア」や「ネパール」をテーマにしたグループに加え、「ハイチ」や「ルワンダ」を題材としたグループも見られた。テーマの選定や、視聴者に分かりやすく伝えるための構成を考える作業は容易ではなかったが、どのグループも創意工夫を凝らし、熱心に制作に取り組んでいた。

動画制作を通じて、生徒たちは情報収集・構成・表現といったスキルを実践的に身につけるとともに、学んだ内容を自分の言葉で再構築し、他者へ発信する経験を得ることができた。



《生徒が作成した動画のワンシーン》

完成した動画作品は、3学期に実施された勤務校の英語・外国語スピーチコンテストのプログラム内でも紹介され、高校3年生からの大切なメッセージとして中学生・高校生全員に向けて発信された。また、iEARN の Collaboration Center にも投稿し、協働学習に参加している他国の教員や生徒とも共有した。これによ

り、生徒たちの学びが校内にとどまらず、国際的な学習コミュニティへと広がる機会となった。

この体験を通して生徒たちは国や文化が異なっても共通して守られるべき「人権」と「質の高い教育」の重要性を改めて確認するkとおができた。映像や調査を通じて世界の現状を多角的に学び、当事者の声に耳を傾けることの大切さを実感した点は大きな成果である。

さらに、生徒たちは、学んだ内容を自分の中だけに留めるのではなく、周囲の人々に伝え、共有することの重要性にも気づいた。動画制作や国際交流を通して、社会課題に対して主体的に発信しようとする姿勢が育まれたことは、本プロジェクトの大きな教育的成果である。自らの学びを社会に向けて表現し、他者と共有する経験は、生徒たちが今後グローバル社会の一員として行動していく上で、重要な基盤となるものである。

5 成果と課題

○成果

Girl Rising のムーブメントは、プロジェクトに参加する生徒たちが、力強い地球市民として成長するための重要な契機となっている。生徒たちは、国境を越えて共に学び合い、互いに励まし合う仲間を得ることで、社会課題への意識をさらに深めている。

毎年実施している遠隔授業を通じて、各国の生徒たちは、同じ地球に生きる同世代の仲間として、SDGs（持続可能な開発目標）の「質の高い教育」および「ジェンダー平等の実現」に積極的に関わることの重要性を改めて認識している。これらの学びは、生徒たちが将来、国際社会の一員として主体的に行動するための基盤となっている。

○課題

プロジェクトをスムーズに進めるためには、いくつかの課題がある。まず、国際協働学習のプラットフォームである「Schooly」の使用に関する課題がある。今回の協働学習に

2025 年度 JEARN 活動報告集

参加した教員からも、使い方が分からないという声があり、その結果、以前に比べて

「Schoolology」に参加する教員が減少している状況がある。この問題については、現在 iEARN で新しいプラットフォームを検討しているので、改善することを願っている。次に、他のプロジェクトでも見られる共通の課題として、相手校とのスケジュール調整がある。プロジェクトを円滑に進めるためには、相手校の教員と事前に、開始時期や内容についてしっかりと打ち合わせを行う必要がある。また、iEARNに加えて、WhatsApp や Messenger などの SNS を活用し、担当教員との密なコミュニケーションを取ることが重要だ。

さらに、生徒同士の学びを深めるためには、フォーラム上で感想を述べるだけでなく、自国の授業で学んだことを共有したり、他の生徒の意見に対して批判的に考察したりする力を育むことが重要だ。加えて、見えてきた課題やその解決策を提案できる力を養うことも求められる。これらの力を身につけるために、教師は日々の授業で工夫を凝らし、生徒が主体的に考え、意見を深められるようなファシリテーションスキルを身につけることも求められる。

世代間のオンライン異文化間協働学習に見る学習者の相互作用

～高専学生と台湾の中学生との平和教育の実践～

仙台高等専門学校 若生 深雪

本稿では、日本の高等専門学校の4年生（大学1年生相当）と台湾の中学生を対象として実践したオンライン協働学習の実践について報告し、その過程で明らかになった学習成果および課題を示す。本実践は、英語科目の一環として行われ、持続可能な社会の実現に向けて、国を跨いだ若者同士の連帯感を育成することを目標とした。具体的には、オンライン遠隔環境と Padlet の ICT ツールを活用するとともに、異なる世代の若者同士をつなぐための方法論を教育手法として取り入れた。文化的・言語的背景が異なり、さらに世代差を有する学習者が協働的に学ぶ際に留意すべき点については、両国の学習者学びの様相を観察した授業者の所感をもとに考察する。

オンライン 異文化間協働学習 世代間 平和教育

1. 実践の背景

急速なグローバル化が進む中、各国の教育機関はその目的達成に向けて国際化を積極的に推進している。高等専門学校では、第4次教育振興計画のもと（文部科学省、2023）、グローバルエンジニアの育成を使命として掲げている。一方、台湾においても、国家発展の基盤として早期英語教育の導入が教育施策として位置づけられている。

このような政策的背景を受け、各国の教育現場では国境を越えた若者同士の学習活動が活発化している。従来は同一校種で実施されていることが多かった国際交流も、近年では世代を超えた学び合いへと拡張・発展しつつある。日本における世代間の国際共修の例としては、国内の留学生と中学生による対面が挙げられ、仙石(2023)は、その学習効果として、知識獲得にとどまらない新たな価値観の創造を指摘している。また、桜井(2020)や金子(2023)も、大学生と中学生による実践報告を行っている。本稿で扱う実践は、これらの対面型の取組みとは異なり、オンライン環境および ICT を活用した世代間の国際共修を試みたものである。

2. 実践方法

2-1 参加者

本実践に参加した日本と台湾の学習者は、いずれも漢字文化圏に属し、儒教的価値観を共有している。しかし、日常生活や学習経験は大きく異なり、家庭で使用される母語の多様性、興味・関心、認知的習熟度にも差が見られる。

国際的な学習経験の観点から比較すると、日本側の学生は、義務教育段階から今日まで、海外の学校とのオンライン等を用いた交流や協働学習を経験した者は限定的であった。高等専門

学校においても、工学分野の専門教育に特化し、英語を用いた協働学習の機会多くはない。一方、台湾の生徒は、2018年より、政府主導の「2030年バイリンガル国家政策」のもと、小学校入学時から英語教育を受けており、国際交流が積極的に推進される教育環境に置かれている。当該校の生徒は、台湾の大学生との遠隔交流の経験も有していた。

以上を整理すると、両学習集団の間には、国際協働学習の経験値に基づく対照的な特徴が認められた。すなわち、英語力を活用した国際的な実践経験が豊富な台湾の生徒と、年齢的には上であるものの国際協働学習の経験が限定的な高専学生という対照的な特徴が見られた。

2-2 教育手法

O'Dowd & Ritter (2013)は、オンライン学習には、対面交流とは異なる特有の課題が存在し、コミュニケーションの不一致が生じやすいと指摘している。本実践では、国を越えた若者同士の連帯感を育成することを目標とした。そこで、日本と台湾という異なる文化的・言語的背景をもつ二つの学習集団が協働するにあたり、これらの差異を課題ではなく相乗効果として活かすことを意図した。そのための理論的枠組みとして、Allport(1954)の接触仮説を参照した。この理論では、適切な条件下での異文化接触が偏見の低減に寄与することを示すものであり、先行研究においても本理論を導入した実践が、相手集団への理解促進や態度変容に効果を示したと報告されている。そこで本実践では、偏見低減のための4条件を以下のように適用した。

- (1) 共通の目標：平和希求という価値を共有し、協働の方向性を一致させる。
- (2) 協力的相互作用：ペアで作成した作品を相互

に評価し合う活動を通じ、協働的な関わりを促進する。

(3) 平等な地位：語学力や年齢差を、互いの強みを補完し合う互助的な関係として位置づける。

(4) 制度的支援：両教育機関の枠組みの中で、相互尊重を基盤とした支援体制を確保する。

さらに、深い学びを伴う交流を実現するためには、綿密な授業設計が不可欠である。しかし、本実践ではオンライン遠隔授業が実質 1 回のみであったため、複数回の交流に相当する効果を生み出す工夫を施した。具体的には、1) ペア編成によって親密度を高める環境を整える、2) Padlet を活用し、双方の活動報告を頻繁に共有する、3) 両国の学習者に共通する話題をテーマとした協働タスクを設定する、といった授業内容を組み込んだ。

2-3 実施計画

本実践には、筆者が勤務する高等専門学校の学生 37 名と、台湾の桃山市立八徳国民中学の 1・2 年生 27 名が参加した。交流は、2025 年 10 月から 2 月にかけて実施され、その概要を表 1 に示す。

日本側の授業は、全 15 回の 90 分授業で構成された。授業の前半では実践的な英語スピーキング技能の向上を目的とした活動を行い、後半では交流に向けた事前学習、制作活動、Padlet への投稿などを実施した。台湾側では、全学年混合による英語選択授業の中で交流活動が行われた。活動の中心となったのは、1 月 7 日に実施したオンラインによる平和教育の協働学習であった。この授業では、長崎の被爆者であり英語の語り部として活動する大庭氏の講話を、両国の参加者がオンラインで聴講した。

両国の学習者は、オンライン当日の対話に向けて相互理解を深めることを目標とし、それぞれの国で立案されたタスクに取り組み、ペアとなる相手に向けて成果を発信した。

3. 成果と協働タスク

両国の学習者が協働タスクに取り組みながら、ペアとなる相手に学習成果を伝えることを目的

として、英語を用いて Padlet 上へのメッセージ、グリーティングカードの送信、スライド等の成果物を作成した。本節では、これらの成果物をもとに、交流を通じて学習成果を振り返ることとする。

3-1 協働タスクの構成

日本側と台湾側は、それぞれが相手ペアに向けて提示する協働タスクを設定し、以下の活動に取り組んだ。

<日本側のタスク>

- ①音声入りの文化紹介スライドの作成
- ②グリーティングカードの作成
- ③原爆に関するスライドの作成

<台湾側のタスク>

- ①台湾と日本の文化を紹介する動画作成
- ②日本の学生に贈るコースターの制作
- ③原爆の語り部への質問作成

いずれの活動も、相手ペアとの協働的なやり取りを意図して設計された（表 1 を参照）。

3-2 成果物とペアのやり取り

成果物は、両国で対になる形で交換され、以下のように 4 回のペア交流が行われた。

- ・日本側① ⇄ 台湾側①'
- ・日本側② ⇄ 台湾側②'
- ・日本側③ ⇄ 台湾側③'
- ・日本側④ ⇄ 台湾側④'

このように、各タスクと成果物が対応し、ペア間での相互発信とフィードバックが繰り返されることで、継続的な交流が成立した。

3-3 成果物からの学習効果

3-3-1 世界の文化への注目 成果物①と①'

第 1 回のタスクでは、世界の文化に注目することで、他国文化のみならず自国文化を他者の視点から捉え、相対化することを目的とした。日本側では、ホールの「文化の氷山モデル」を学習し、文化理解の枠組みを確認したうえで、文化紹介のスライド作成に取り組んだ。その結果、当初は生活文化、歴史・地理的など、知識中心の単眼的な捉え方が多く見られたが、活動を通して比較・相対化の視点が加わり、文化的背景や文脈を踏まえた複層的な考察へと発展し

表 1 日台協働学習の授業計画

Padlet	日本の高専生	台湾の中学生
デジタル掲示板の活用	10 月 ①文化紹介スライド作成 …→	①' 文化に関する 1 分間動画
	<u>自己紹介カード・動画の交換 パートナーマッチング</u>	
	11 月 ②グリーティングカード …→	←… 11 月 ②' コースター製作
	12 月 ③原爆スライド作成 …→	←… 12 月 ③' 質問作成 (原爆)
<u>長崎語り部/オンライン学習</u>		
	1 月 ④原爆振り返り Padlet 投稿 …→	←… 1 月 ④' 原爆振り返り Padlet 投稿

た。以下は学生が取り上げたテーマの一部である（実際の発表は英語で実施）。

- ・東洋医学と西洋医学の違い
- ・世界の職場での怒りのマネジメント
- ・社会的ヒエラルキーとエチケット
- ・昔話から見える各国の価値観
- ・文化によるアイコンタクトの違い
- ・ヨーロッパの名前の慣習
- ・靴を脱ぐ・脱がない文化の背景
- ・宗教と道徳観
- ・非言語コミュニケーションの違い
- ・高低文脈文化における語彙量の違い
- ・個人主義と集団主義
- ・幸福感の違い
- ・「Yes」の意味の文化差
- ・席を譲る文化 日本とロシアの比較
- ・絶対敬語
- ・世界の迷信
- ・感情表現の文化差
- ・沈黙の文化的意味

一方、台湾側は、文化に関する1分間動画を作成し、意見発表と日本側への質問を提示した。テーマには「宿題なぜ必要か」「田舎と都会のどちらに住みたいか」「世界の朝食の違い」などが挙げられた。台湾側のテーマは比較的限定的であったため、文化を捉える際には多様な視点が存在することを指導し、Padlet にコメントを投稿する際には、複数の観点から考察するように促した。

3-3-2 ペアへの贈り物 成果物②と②'

第2回の交流では、ペアとなる相手に向けて贈り物を作成し、互いの関係性を深めることを目的とした。日本側は、年末年始の挨拶として、デジタルまたは手書きのグリーティングカードを作成した。カードには、これまでのペア間のコミュニケーションを通して得た情報や関心が反映されていた。

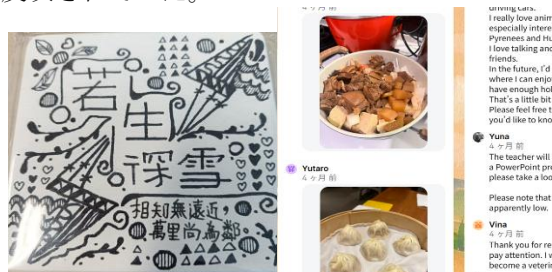


図1 台湾生徒の成果物と Padlet の会話

一方、台湾側からは、各日本人学生の氏名が記された手書きの珪藻土コースターが贈られた（図1参照）。いずれの成果物も、相手に対する理解や思いやりを基盤として制作され、個別

性の高い内容となった。このように、グリーティングカードや名前入りの生活雑貨といった、ペア同士にしか共有されていない情報を織り込んだ贈り物の交換を通して、両国の学習者は交流の醍醐味を実感することができた。

3-3-3 平和教育の事前学習 成果物③と③'

第3回の交流では、1月7日に実施した平和教育に向けて、事前学習と事後学習の成果を両国で共有した。日本側は、原爆に関する事前調査の内容と、オンライン講話に向けたメッセージを1枚のスライドにまとめ、ペアに発信した。

一方、台湾側では、大庭氏への質問を作成し、その内容を日本側と共有した。

- ・「今も世界のどこかで戦争が起こっていることに対してどのような考えや気持ちが浮かびますか」
- ・「ご自身の体験を皆に伝えようと考えた勇気はどこからきましたか」
- ・「ご家族を失い、計り知れない苦しみを経験された中で、どのような力が支えとなり今日まで生きぬいてこられたのでしょうか」
- ・「長崎への原爆投下の歴史を振り返ったとき、今日の若者たちが見落としがちな重要な教訓は何だと思いますか」

寄せられた質問には、被爆体験者の視点や平和への思いに迫るものが多く見られた。

3-3-4 平和教育の事後学習 成果物④と④'

事後の振り返りは、日台の両学習者が同一のプリントを用いて実施した。設問は、

1. 印象に残ったこと
 2. これからの日常生活でできること
- の二点で構成されていた。

振り返りの内容には、両国の学習者に共通する傾向が見られた。印象に残った点としては、大庭氏が語った投下直後の長崎の光景や、大庭氏のその後も続く後遺症の苦しみなど、被爆者自身の言葉で語られる具体的な体験が挙げられた。また、今後の生活への影響については、今日の平和の尊さを再確認し、それを維持するために自分に何ができるかを考える姿勢が見られた。日本の学生においては、将来エンジニアとして、社会に貢献する立場を意識し、技術者として平和にどのように寄与できるかという視点で自分事とし自らの課題として捉える記述が見られた。

4. 学習成果と課題

本節では、世代の異なる学習者同士によるオンライン協働学習の可能性を検討するため、指導者の視点から学習成果と課題を整理する。

4-1 学習成果

本実践を通して、以下(1)~(4)のような学習成果と(5)~(8)の課題が確認された。

(1) 英語の実践的活用

AI 翻訳を用いながら英語を適切に使用することで、両国の学習者は円滑なコミュニケーションを実現していた。英語を正確に使うことよりも、相手に伝えるために使う実践的な言語使用が促進された。

(2) 本物のコミュニケーション経験

学習者は、相手の気持ちや考えを理解し、自分の思いを伝え合う本物のコミュニケーションに英語を活用する経験を得た。これは教科書的な英語学習では得がたい経験であった。

(3) 日常的な情報交換の価値の実感

ニュースや二次情報ではなく、相手の日常生活や文化に関する「ありのままの情報交換」が相互理解に大きく寄与することを実感していた。

(4) 相手意識の芽生えと共通点の探究

学習者は、言語や世代の違いを越えて相手との接点を見いだそうとし、お互い文化・関心・生活習慣などの共通性を積極的に探求していた。これは、これまでの学習経験には見られなかった新たな姿勢である。

(5) 年齢差を越えた学びの引き出し

成果物を契機として、年齢差を越えた相互の学びを深めるための教員主導の働きかけが十分に機能しなかった。学習者同士のやり取りに依存しすぎた側面がある。

(6) Padlet 交流の継続の難しさ

両校の授業時間や学校行事の違いにより、Padlet でのやり取りが途切れる場面があった。そのため、相手意識を継続的に育むことが困難であった。

(7) 接触理論の適用に関する検討

本実践では Allport の接触理論を参照したが、AI 翻訳の活用、両学習者の態度の安定性、精神的な安定性、さらには指導者同士の長年にわたる関係性といった文脈的要因により、相手を尊重する態度がすでに基盤として形成されていたと推論される。そのため、接触理論の条件そのものよりも、むしろその他の条件をどのように考慮するかが重要であった可能性がある。

石森(2022)は、地域の小学生と大学生の日本人同士の異校種間の交流において、英語コミュニケーション意欲の向上を報告している。その鍵として「状況の設定」「伝え合う必然性」「相手意識」を挙げている。本実践では、異文化学習経験が限定的、接触頻度が少ない(オンライン 1 回)という前提があり、同様の効果を得るには条件が不十分であったと考えられる。

(8) 相手意識の醸成方法の再検討

接触機会の少なさを補うために、ペア間の自

主性に依存したやり取りを重視したが、これは学習者間の積極性の差を拡大させる結果にもつながった。むしろ、

- ・ペア交流は最低限に抑える
- ・指導者が成果物や投稿に対して意図的にフィードバックする

といった介入の方が効果的であった可能性がある。

5. 幅広い集団間の交流に向けて

本実践は、Allport(1954)の接触理論を基盤に、共通の平和希求をテーマとして世代間を超えた連帯感の育成を試みたものである。その結果、異文化・異世代の学習者が相互理解を深め、英語を媒介とした本物のコミュニケーション経験を得るなど、一定の学習成果が確認された。

一方で、理論的枠組みにより、両集団が他集団を受容するための基盤は整えられていたものの、その枠組みを効果的に運用するための指導法や交流条件の設定には課題が残された。今後は、交流条件を十分に踏まえ、接触機会の設計、指導者による介入、学習者の負担調整を含めた実践計画の構築が必要であることが示唆された。

参考文献

- Allport, G.W. (1954). *The Nature of Prejudice*. Cambridge, MA: Addison-Wesley.
- O'Dowd, R. & Ritter, M. (2006) Understanding and Working with Failed Communication in Telecollaborative Exchanges. *CALICO Journal*, 23(3), 623-642 DOI:10.1558/CJ.V23I3.623-642.
- 石森広美(2024). 「相手意識」を高める小学校外国語教育の授業と指導法の工夫：異校種交流に着目して. 北海道教育大学紀要, 74(2), 45-59.
- 文部科学省(2023). 次期教育振興計画について(答申).
- 仙石祐・永田浩一・桑原摩帆(2023). 日本の大学で学ぶ留学生と中学生の学び合い 中学生を対象とした国際共修と世代間学習の視点からの分析. グローバル人材育成教育研究, 10(2), 2-10.
- 桜井良(2020). 中学生と留学生による海洋保全をテーマとした国際交流プログラムの実施. 政策科学, 27(2), 101-110.
- 金子義隆(2023). 中学生の英語学習動機を高める要因：留学生との異文化交流会の効果再検証. 明海大学教職課程センター研究紀要, 6, 1-17.

大学実践編 (Youth Project)

Youth Project 実践報告

-韓国・台湾との Cultural Package Exchange-

青山学院大学 岡田麻唯・栗田智子・勝又恵理子

青山学院大学国際政治経済学部が、JEARN のユースプロジェクトに参加し、Cultural Package Exchange プロジェクトを通して、日本と海外（韓国・台湾）の学校の国際協働学習を促進するファシリテーターを担った。また、交流先の韓国と台湾へパッケージを届けに、岡田・栗田・勝又が学校訪問し、先生や生徒と直接対面で交流を行った。

ユースプロジェクト 国際協働学習 ファシリテーター Cultural Package Exchange

1. はじめに

本学では、2020 年から、JEARN の Youth Project の活動を通して、iEARN に連なる小学生・中学生・高校生の国際協働学習を促進する活動を続けてきた。

2025 年度は、Cultural Package Exchange プロジェクトにて、日本と海外の生徒同士の交流を深めるファシリテーターを務めた。これらの活動を通して、ファシリテーターである大学生は、それぞれの先生のリクエストを踏まえ、また日本と海外と異なる学校環境に理解を深めながら、プロジェクトを進めていった。特に日本の学校の生徒には、英語のサポートを行った。交流を通して、対象年齢に合わせた生徒への言葉選びや主体的参加を促す声かけなど、調整・工夫する姿が見られ、英語でのコミュニケーション・スキルを向上させていた。

これらの経験は、大学生のファシリテーション能力の向上にもつながったと考える。

2. 目的と方法

2-1 目的

以下の3点を目的とする。

- ①複数の学校をつなげるグローバルリーダーとなり、ファシリテーターとしての経験を積む。
- ②異文化コミュニケーション力を高める。
- ③対象年齢や文化に合わせたファシリテーションスキルを学ぶ。

2-2 方法

1) 実施計画案

Youth Project に参加する大学生が、3つのプロジェクトチームに分かれて、準備を行った。準備は、週1回昼休みに対面で行っている定期ミーティングでの話し合いに加え、別日を設けて、対面と ZOOM でミーティングを数回行った。

2) 内容項目

Cultural Package Exchange プロジェクトにて、お互いの文化を学ぶ国際協働学習のサポートを行った。また、初めての取り組みとして、韓国と台湾の学校へ訪問し、直接パッケージの交換を行った。

3. 活動内容

3-1 具体的な実施内容（スケジュール）

2025 年

- 9 月 韓国・台湾・日本の学校の先生方の企画、スケジュール相談
- 10 月 週一回の定期ミーティングにて準備
韓国の中学校と Padlet 交流
- 11 月 台湾の中学校と Padlet 交流
韓国の中学校へ訪問。青山学院中等部との Package Exchange 実施
- 12 月 韓国の小学校・鶴ヶ島第二小学校の先生・大学生ファシリテーターの ZOOM 顔合わせ・音声チェック・スライドチェック／本番オンライン交流

2026 年

- 1 月 韓国の小学校・鶴ヶ島第二小学校
Package Exchange 実施
- 2 月 青山学院中等部と Package Exchange の準備、Padlet 用の自己紹介・動画作成
- 3 月 台湾の中学校へ訪問。青山学院中等部との Package Exchange 実施

3-2 鶴ヶ島市立鶴ヶ島第二小学校と韓国 Haemil Elementary School（ハミル小学校）の交流

2025 年 10 月より、鶴ヶ島市立鶴ヶ島第二小学校の4年生と Haemil Elementary School の4年生の交流準備を始めた。大学生ファシリテーターは、鶴ヶ島第二小学校の児童に向けて、パッケージに入れるお手紙の定型文作成、文化紹介のアイテムの例示などでサポートを行った。オンライン交流では、交流内容・タイムスケジュー

ールなどの計画を立て、当日は進行を行い、交流がスムーズに進むようサポートを行った。

3-3 青山学院中等部と韓国 Jochiwon Middle School (ジョチウオン中学校) の交流

2025年10月より、青山学院中等部の国際交流同好会の生徒と Jochiwon Middle School の英語クラブの生徒が交流を行った。パッケージを送り合う前には、Padlet を通して自己紹介や学校紹介を行い、お互いを知る機会を得た。大学生ファシリテーターは、青山学院中等部の生徒に対し、Padlet 上での英語サポートから、文化紹介のアイテムの例示・説明文作成まで伴走した。日本からのパッケージは、岡田が韓国を訪問し、生徒に直接届けた。お互いにパッケージ開封の様子を撮影して共有するなど、相互交流が育まれた。

3-4 青山学院中等部と台湾 Kaohsiung Municipal Jhengsing Junior High School (高雄市立正興國中) の交流

2025年11月より、台湾 Kaohsiung Municipal Jhengsing Junior High School の中学1年生と Padlet での自己紹介交流を開始した。大学生ファシリテーターは、青山学院中等部の国際交流同好会クラスにて、生徒たちと一緒に学校紹介や文化紹介のアイテムの説明動画の制作に取り組んだ。クラスはすべて英語で行い、大学生ファシリテーターが英語表現や構成のアイデアを生徒たちと話しあった。2026年3月には岡田・栗田・勝又が台湾を訪れ、完成したパッケージを直接届け、台湾からのパッケージも受け取った。



写真1 英語でアイテムの説明文作成中

3-5 台湾訪問報告

パッケージ交換を行った Kaohsiung Municipal Jhengsing Junior High School の訪問では、校長先生および国際交流担当教員、生徒計27名の歓迎を受け、高雄市の紹介や学校生活に関するプレゼンテーションを聴講した。また、伝統楽器やオーケストラの演奏を鑑賞し、文化理解を深める機会となった。

また、iEARN 台湾のメンバーと交流の機会を持った。前理事および現理事と対面し、国際交流に関する情報交換を行った。今後も良好な関係を維持し、交流を継続していくための繋がりを築くことができた。

今後の新たな交流候補校として、Fuhe Junior High School in New Taipei City (新北市立福和國民中學) を訪問し、校長先生および教員、生徒との意見交換を行った。学校紹介やパフォーマンスによる歓迎を受けた後、青山学院の iEARN を通じたこれまでの国際交流活動について紹介を行った。生徒から日本の学校生活や文化に関する質問が寄せられ、生徒の高い関心と積極性がうかがえた。



写真2 iEARN 台湾メンバーとの写真

4 成果と展望

日本と海外の学校をつなぐ橋渡しの役割として、ファシリテーターの経験ができたことはとても貴重な機会であった。小学生のオンライン交流では、大学生ファシリテーターがいつも以上に明るく、楽しい雰囲気を率先して作る努力をしていた。終了後、生徒からの好評価をもらうことで、自信にもつながっていた。

青山学院中等部では、クラスを大学生が担当し、英語を使って生徒とプロジェクトの準備に取り組めたことも、ファシリテーターのスキル向上につながる経験となった。生徒の様子や英語のレベルが明確にわからない中、英語での説明の仕方を事前に練習したり、生徒からの発言を促すためのグループワークの方法を考えたりと、準備をして挑んだ成果が出ていた。

今回は、交流先の海外の学校へ直接訪問できる機会を持てたことで、より深い関係構築が実現できたことも大きな成果である。

今後は、学生とともに訪問できることが望ましい。実現に向けての準備として、生徒同士をつなげるファシリテーターの経験を重ね、その時々の子の様子に合わせた問いかけができるファシリテーションスキルや英語レベルによって話し方を工夫するスキルを向上させていくことが期待される。

奥能登の過疎地域における ICT を活用した 国際協働学習の実践と教育的意義

—地域愛と世界への関心の促進を目指して—

高野 寿菜（金沢星稜大学学部生）・清水 和久（金沢星稜大学）

本研究は、奥能登珠洲市の小規模校を対象に、ICT を活用した国際協働学習の交流プログラムを構築・実践し、児童の地域愛と世界への関心の促進を検討したものである。各活動後のアンケート等をもとに分析した結果、台湾の児童との交流を通して地域の魅力を発信する中で地域理解が深まり、世界への関心と地域愛が循環的に高まる様子が確認された。さらに、地域をもっと知り伝えたいという意欲や、将来再び地域に関わろうとする意識を育む可能性も示された。

国際協働学習 ICT 地域愛 魅力 世界への関心

1 はじめに

筆者は小学生の頃、英会話教室に通い、海外の先生や友だちと交流する中で、英語が通じる喜びや異文化体験の楽しさを実感した。それと同時に、英語学習意欲や世界への関心、地域や自国の魅力への気づきも得た。この経験を踏まえ、学校現場で誰もが「英語が伝わる喜び」や「世界とつながる楽しさ」を実感できる学習機会を提供することの重要性を強く感じた。その思いから、筆者は昨年度、金沢市と台湾の小学生をつなぐテディベアプロジェクトを実施し、その過程で児童の英語学習意欲や地域への誇りが高まることを確認した。そこで、本研究では昨年度の実践を活かし、過疎化が進み「何もない地域」と言われがちな奥能登・珠洲市の小規模校を対象に、ICT を活用した国際協働学習を行った。児童が自地域の魅力に気づくきっかけをつくるとともに、地理的に世界と関わる機会が少ない子どもたちの世界への関心を広げ、自地域への誇りを育むことを目指す。

2 研究の背景

近年、グローバル化や情報化の進展、さらに地球環境問題への関心の高まりなどを背景に、国境を越えた人々の繋がりはより一層強まっている。このような社会では、多様な文化的背景をもつ人々と協働し、課題解決に取り組む力が求められる。文部科学省(2021)でも、探究的な学習を通して他者を尊重し、持続可能な社会の創り手となる資質を育む「協働的な学び」の重要性が示されている。

さらに、ICT 機器の発達により、距離や規模の制約を越えた学習が可能となり、ICT を活用した国際協働学習の実践は増加傾向にある。実践の中には、外国人との交流が自地域の良さに気づく契機となった例もみられる。また、有田(2021)は、国際交流において、外国人による地域評価が住民の郷土意識の向上や子どもたちの地域理解に影響を与えたという事例を報

告している。

一方で、既存研究の多くは都市部を中心とした実践が多く、過疎地域の小規模校を対象とした研究は限られている。人口減少や地域資源の制約により、児童が異文化に触れたり、自地域を外の視点から見直したりする機会は十分とはいえない。このような課題に対し、筆者はテディベアプロジェクトがその機会を補う可能性をもつと考えた。

実際に、角納(2022)のテディベアプロジェクトに関する実践報告では、海外の児童との交流を通して英語や異文化への関心が高まり、学習意欲の向上につながったこと、異文化との比較を通して児童が自地域の良さを再認識する機会となったことが示されている。

以上の先行研究を踏まえ、本研究では、奥能登・過疎地域の小学校において ICT を活用したテディベアプロジェクトを実践することで、児童が地域の魅力を再認識する機会を提供するとともに、地域への愛着・世界への関心がどのように促進されるのかを明らかにすることを目的とする。

3 研究の方法

- ① 対象校の決定・特徴の分析
- ② 奥能登・過疎地域に特化した単元開発
- ③ 珠洲版テディベアプロジェクトの実践（参与観察・アンケート調査）
- ④ 結果の分析、地域愛・世界への関心がどのように促進されたか明らかにする
- ⑤ 過疎地域で実践することの教育的意義

4 研究の内容

4-1 対象校の特徴

対象校 石川県珠洲市 M 小学校
(5・6年生複式学級 計13名)

交流校 台湾高雄市 S 小学校
(5年生 計28名)

珠洲市は能登半島の先端に位置し、自然や伝統文化、漁業・農業などの豊かな地域資源をもつ地域である。一方で都市部から遠く、交通の便も限られているため、児童が外国人と関わったり、世界に目を向けたりする機会は少ない。さらに、近年は人口減少や若者の流出が進み、将来地域を担う世代が地域の魅力を再認識することが重要だといえる。今回の対象校は小規模校で、5・6年生は複式学級である。また、この学校は筆者の母校でもあり、10年前には約110名いた全校児童数が現在は31名まで減少している。このことから、児童が地域の良さに気づき、地域への愛着を育むことが重要であると考えられる。

4-2 奥能登・過疎地域に特化したティディペアプロジェクトの単元開発

今回の奥能登・過疎地域での実践で目標とするのは、主に「地域愛」と「世界への関心」の促進である。図1は、それらの視点を踏まえ筆者が開発した「珠洲市版ティディペアプロジェクト」の年間スケジュールと各活動のねらいである。

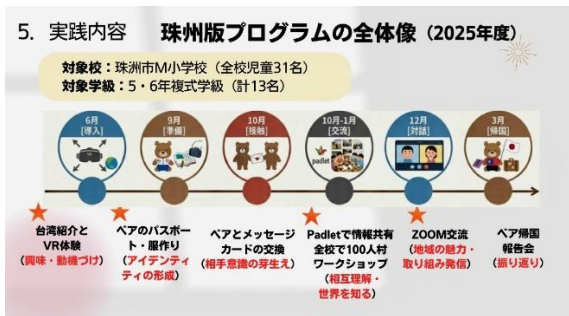


図1 「M小学校向けに開発したプログラム」

本プログラムでは、はじめに児童が相手国や地域についてVR体験や台湾紹介で知り、台湾に興味をもつ活動を行い、その後、オンライン交流を通して関係を深め、最後に学んだことや地域の魅力を発信する流れとなるよう構成した。本実践では、2024年度における清水ゼミでの実践や珠洲市の特性・児童の思いを踏まえ、以下の点を変更した。

表1 珠洲版プログラムの主な変更点

変更点	金沢版(2024清水ゼミ)	珠洲版(2025本研究)	変更理由・意図
①台湾紹介とVR体験	プログラムの最後に実施	→ 交流の導入として最初に実施	・交流前に相手国への関心、基礎知識をつくり、主体的な交流参加を促す
②ペアと児童のプロフィール内容・ペアの服決め	・自分に関する紹介が中心	→ 台湾の児童へのメッセージつき	・台湾の児童に相手意識をもたせるため
	・制作なし	・珠洲の祭りや水引、日本の国旗などをモチーフに制作	・ペアを「地域の代表」として送る意識と愛着を育むため
③メッセージカードの交換	最後に実施	→ ペアの交換時と、最後の両方で実施	・早期に相手の存在を実感させるため
⑤ペアとの生活を発信・共有	・自国の発信のみ	→ 発信+相手国の投稿にコメントや「いいね」	・双方向性のある交流にするため
⑥100人村ワークショップの実施形態	・5年生のみで実施	→ 全校児童で実施	・小規模校のよさを生かし、学校全体で世界への関心を高めるため
⑦ZOOM交流での発信内容	・特産物の特徴が中心	→ 珠洲の魅力紹介・児童の地域への思い中心	・地域の魅力を児童が発信・再認識するため

このように、本実践は過疎地域の教育環境を制約ではなく強みと捉え、地域性を生かした学習活動として再構築した点に意義がある。

4-3 珠洲版ティディペアプロジェクトの実践(参与観察・アンケート調査)

本実践は、図2の変更点を踏まえ、2025年6月から2026年3月にかけて実施した。今回は珠洲版ティディペアプロジェクトとして再構築した6つの活動を取り上げ、その結果と効果を整理する。また、これらの活動が児童に与えた影響について、参与観察記録、アンケート調査などの結果をもとに分析を行った。

① 導入：教室にいながら台湾へ。VR体験が引き出した「もっと知りたい」という探求心

台湾の文化や小学生についてもっと知りたい



図2 VR体験後における児童の意識の変化

本実践の導入では、台湾の学校や生活の様子を大学生が紹介し、その後、VR教材を用いて疑似的な海外体験を行った。視覚的・体験的に異文化を感じられる活動を通して、児童の興味関心を喚起することを目的とした。図3にも示したようにVR体験後には、「もっとS小学校や台湾を知りたい」「実際に話して

みたい」といった発言が見られ、交流への内発的動機づけが高まる様子が確認された。本活動は、その後の協働的な学習活動へ向かう心理的な準備段階として機能したといえる。

② 「地域の代表」としてベアを送り出す



図3 地域性を反映したティディベア

次に、交流の媒介となるぬいぐるみのパスポート作成および衣装制作を行った。この活動は単なる制作活動ではなく、性格や名前を考える段階で「代表としてどんなクマを送るか」「自分たちはどんな地域に住んでいるのか」を考える契機となり、地域アイデンティティの再認識につながったと考えられる。

③ 海を越えて届いた手紙。相手の存在を

「実感」する瞬間。

その後、ベアとともにメッセージカードを作成し、相手校と交換した。交流校のベアから自分あてに手紙が届いたことで、児童の交流相手への意識が高まり、これからの交流が楽しみという気持ちが芽生えていた。また、「相手にいろんなことを伝えたい」「伝わってほしい」という思いも育まれていた。

④ Padlet での交流。日常の共有が生む「比較」と「再発見」



図4 Padlet での交流の様子

交流はオンライン掲示板 Padlet を活用し、ベアとの日常生活や学校生活の様子を共有し合った。非同期型の交流であるため、時間差があっても互いの投稿を閲覧し、コメントを通じて交流することが可能であった。特に、

相手校から肯定的な反応は、児童の自己効力感を高め、「もっと紹介したい」という意欲に繋がっていた。海外の児童からの視点が、自分たちの地域を再評価する契機となったといえる。

⑤ 世界を知る100人村ワークショップ。小規模校だからできる「縦の学び」



図5 ワークショップ後、世界に興味を持ったかどうか

全校児童を対象に実施した100人村ワークショップでは、世界の現状や課題、多様性などを体験的に学ぶことができていた。児童は、自分たちが世界全体の中でどのような位置にいるのかを実感し、異なる言語・生活環境の存在を具体的に理解した。この活動により、世界は広いという認識とともに、異文化を尊重し協力し合う態度の育成が促された。

⑥ ZOOM でリアルタイム交流。地域の魅力・取り組みを英語でプレゼン。



図7 ZOOM 後、自分の地域がもっと好きになったかどうか

オンライン会議ツール Zoom を活用した、リアルタイム交流では、児童が珠洲市の自然や伝統行事、学校生活の様子などを英語で紹介する様子がみられた。発信に向け、地域の歴史や特色について改めて調査することで自地域への理解が深まったと考えられる。また、相手校からの質問に答える中で、自分たちの

地域を客観的に説明する経験を積むことができていた。また、図7示したように、ZOOMを通してすべての児童が自分の地域をより好きになったことがわかる。リアルタイムでの反応は、交流の実感を強め、英語の学習意欲を高めるほか、自地域の魅力を再認識する効果があったといえる。

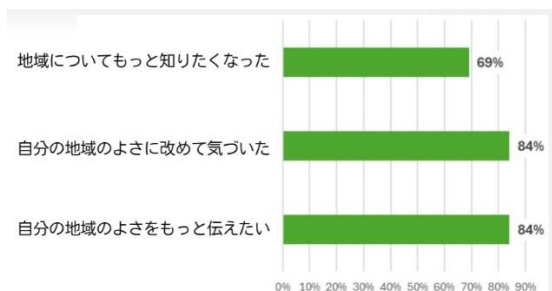


図8 ZOOM 交流後の地域に対する気持ち

加えて、図8に示したように、相手の国や学校の様子を知ったり、それらを自地域と比較したり、自地域を相手に紹介したりすることなどを通して、「地域の良さに改めて気づいた」児童が約70%いたことがわかった。また、「自分の地域についてもっと知りたくなった」「自分の地域のよさをもっと伝えたい」のように、地域をもっと知り、発信したいという思いも促進されたことが明らかとなった。

5 まとめ

実践の結果、児童の地域愛と世界への関心は、他国の生活や文化を知り、自地域と比較し、その魅力を海外の児童に伝えるという学習の循環を通して相互に高まることが明らかとなった。自地域について改めて調べ直し、写真・映像・英語表現を工夫して発信する過程で、日常の中にある自然や文化、生活の価値に気づくことができるといえる。さらに、海外の児童からの肯定的な反応は、「自分たちの地域にも誇れるものがある」という実感を生み、地域への愛着と誇りを一層深める要因となっていた。このことから、世界への関心と地域への愛着は一方向的に育まれるのではなく、相互に影響し合いながら循環的に形成されることが示唆された。また、小規模校であることは、一人ひとりが学習の主体として役割と責任を担う環境を生み出し、学びへの積極的な関与を可能にしていた。加えて、

VR や ZOOM 対話、Padlet でのオンライン交流などでの ICT 活用は、物理的距離の制約を越えて世界とつながる機会を創出し、海外との接点が限られがちな過疎地域においても多様で実感的な学習を実現できることを示した。

以上により、本実践は、外の視点との出会いや他国との比較を契機として地域の魅力を再発見し、世界への関心と地域への愛着を同時に育む学習モデルとして、過疎地域・小規模校においてこそ大きな教育的意義をもつ可能性を示した。そして、将来的に児童が地域を離れることがあっても、再び地域を見つめ直し、関わろうとする意識や「再び戻りたい」という思いを育む基盤となり得る点においても本実践の意義は大きいといえる。

6 参考・引用文献

1. 文部科学省(2021)
「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～（答申）, p15
2. 栗田智子(2020)
国際協働学習 iEARN レポート ジェイアーンの国際協働学習の成果と課題の考察
グローバル・プロジェクトについての実践状況調査から, p2. 3
3. 栗田智子(2020)
「アイアーンの国際協働学習」とは何か -国際協働、プロジェクト学習、主体的・対話的で深い学び、グローバル・コンピテンスの視点から-, p3
4. 村田晶子「オンライン国際交流と協働学習—多文化共生のために—」、2022年、藤原印刷株式会社
5. 一般財団法人自治体国際化協会(2021)
地域の活性化に国際交流を活かせる自治体とは？～グローバルな動きに対応する施策と心構え～, p4
6. 朝日新聞大阪本社編集局「地方は」取材班「今、何が起きているのか—崩壊と再生の現場から—」、2008年、倉敷印刷株式会社
7. 部科学省(2018) 人口減少時代の新しい地域づくりに向けた学習・活動に関する現状

日本と台湾との国際協働学習を実施した教員の変容

—サポーターとしての大学生の働きかけを通して—

清水 和久（金沢星稜大学）

台湾の小学校と国際協働学習を実施した日本の小学校教員への変容を明らかにすることを目的とする。そのために大学生がサポートを行う国際協働学習のプログラムを開発し、実践後に小学教員にアンケート調査をおこなった。その結果、国際協働学習の導入授業としての学生のワークショップや、学生が支援した台湾の小学生と日本の小学生との少人数 WEB 会議、小学校での台湾訪問の報告会が子供の変容を促し、ひいては小学校教員の変容を促したことが分かった。

国際協働学習 大学生の支援 ZOOM 会議 ワークショップ 台湾の小学校

1 はじめに

筆者はこれまで日本の小学校と台湾の小学校との国際協働学習のコーディネートを経験してきた。当初は2国間で絵をかくプロジェクトであったが、ここ最近は、より手軽にできるぬいぐるみを交換留学生としておくるティピアプロジェクト（以下TBP）*1という形でおこなっている。

このプロジェクトでは台湾から参加する小学校は例年5校とほぼ固定されている。管理職が中心になって進めている学校が2校。英語の教員が中心になって進めている小学校が3校となっている。複数年度続く理由としては、一度始めると同一者が担当となりノウハウの蓄積ができるからと思われる。また、例年筆者とゼミの学生が国際協働学習の仲立ちとして台湾の小学校を訪れることも一因となっている。

一方日本の場合は、総合などのカリキュラムに国際協働学習の内容があるところは皆無であり、たまたま高学年になった担任が、台湾との国際協働学習プロジェクトに興味があるかどうかで、参加できるかどうかが決まってしまう。また、同一学年に複数の学級がある場合、すべての教員の同意が得られるかによっても違ってくる。

未経験の教員には、国際協働学習は難易度が高いと思われており、実際に1年やった後でもカリキュラム化まで行く学校はほとんどない。国際協働学習に初めて取り組む場合に、教員の負担軽減のために、大学生が海外と日本の学校との間に入り、支援体制を組んで行って来た。

2 研究の目的と方法

<研究の目的>

国際協働学習を行う教員の意識の変化とその要因を分析することを目的とする。

<研究方法>

- 1) 大学のサポートを含んだ国際協働学習の単元の開発
- 2) 大学生のサポート内容
- 3) 参加校の特色と実践内容の検討
- 4) 参加教員へのアンケート調査の分析

3 研究内容

3-1 国際協働学習の単元構成（含学生支援）

表1 年間の流れと学生サポート内容

月	小学校での実施内容	サポート内容	サポート機能
5月	国際交流校の応募と決定	担当者の決定	
6月	大学生：導入100人村ワーク	ワークショップ	興味関心の惹起
7月	英語の自己紹介カード準備		
9月	自己紹介カード ペア送付	台湾への郵送	郵送支援
10月	ペアの受領、交流開始、掲示板書き込み		オンライン支援
11月	小学生同士のzoom会議	zoom支援	オンライン支援
12月	掲示板（Padlet）での交流	掲示板管理	オンライン支援
12月	台湾へ送付カード作成	台湾訪問	ミッション実施
1月	大学生の台湾報告会	ワークショップ	ミッション報告
2月	ぬいぐるみの返却、受取り	台湾への郵送	郵送支援

一般的に、国際協働学習に初めて取り組む場合には教員にとって負担が多いと考え、大学生が台湾と日本の小学校との間に入り、サポート体制を組んで行うこととした。

3-2 大学生のサポート内容

大学生のサポートの種類は以下の4点

- ① 児童に対する対面ワークショップ
- ② 交流のオンラインサポート
- ③ 台湾への代理訪問
- ④ 渉外などの交流事務の代行

6月に世界に関心を持ってもらう導入授業として「世界がもし100人の村だったら」のワークショップを参加校の小学校で実施。この内容は、開発教育協会のワークショップ*1をもとに学生がアレンジしたのであり、児童は世界の住人になりきって、世界の言語分布や貧富の差などを体験し、英語の重要性や世界に目を向

けることの重要性を学ぶ。(サポート①)

2学期に交流が始まると学生は、交流クラスごとにオンライン掲示板(Padlet)の管理者となり、自己紹介や学校紹介の情報交換をサポートする。投稿があった場合、まず学生が反応を返し、交流校に投稿内容を紹介したり、投稿を促したりする。(サポート②)

11月ごろには、交流校の児童同士のWEB会議を開催する。WEB会議は、児童の話す時間を確保するために、1グループ5人程度の小グループ同士でおこない、各グループに学生が遠隔で入り、支援する。(サポート②)

12月末には、学生が実際に台湾の小学校を訪問する。この時に日本の小学生から、台湾で見てきて欲しいものや、やってきてほしい事のミッションをもらいし、帰国後の1月に小学校で報告会をすることに繋げる。(サポート③)

ベアを台湾にEMS(国際スピード郵便)で送るなど事務手続きやWEB会議の日時の調整なども担当の大学生が担当する。特にEMSは送る内容の重量別記載などもあり煩雑であるため、現場の先生には荷物を大学に持ち込んでもらい、台湾へのEMS手続きは大学生がおこなった。(サポート④)

3-3 参加校の特色と実践内容の検討

表2 参加校6校 クラス15クラス

	参加単位	担当	属性	教員連絡
1	A校6年A組	担任	中堅	LINE
2	A校6年B組	担任	若手	LINE
3	A校6年C組	担任	若手	LINE
4	B校6年A組	担任	中堅	LINE
5	B校6年B組	担任	若手	LINE
6	C校5年A組	担任	中堅	LINE
7	C校5年B組	担任	若手	LINE
8	D校5年A組	担任	中堅	LINE
9	E校複式A組	担任	若手	LINE
10	F校6年英語	英語	中堅	Chat

F小学校は英語の授業としての取り組みが中心。今回5クラスで2回目の参加、教員と学生の連絡はgoogle Chatを使用。

他の小学校はクラス担任が中心となって今回初めての参加。教員と学生との連絡はLINEで実施。

3-4 参加教員へのアンケート調査

以下①から⑩のアンケート項目についてその結果を記載する

①海外の教育や英語教育に興味・関心はありますか？(4件法)

表3 国際交流についての興味・関心

項目	%
興味がある	50%
どちらかというところ	50%

英語専科の教員の他、学級担任も全員海外の英語教育に関心を持っている状態からのスタートでした。

② 国際交流に対するイメージ(複数選択)

①インターネットを使った国際交流に対するイメージ(交流を行う前)を教えてください(複数回答) 10件の回答

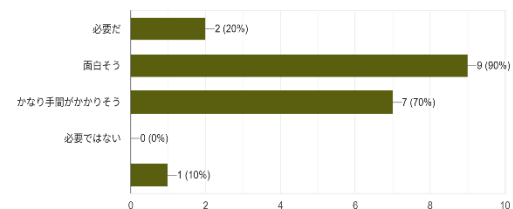


図1 ネットを使った国際交流のイメージ

ネットを使った国際交流に興味がある教員が90%である。同時に手間がかかりそうだと考えている教員は70%なので、同時に2面の思いを持っていることがわかる。

③ 「手ごたえ」を感じた活動は何か?

②今回の国際交流全体を通して、「手ごたえ」を感...ますか?(あてはまるものを全て選んで下さい) 10件の回答

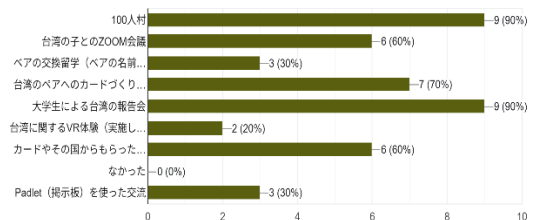


図2 手ごたえを感じた活動(複数回答)

手ごたえ的には、大学生が小学校で実施した「導入時の100人村」と「台湾報告会」が90%と高かった。その理由としては、世界のことや交流相手の情報を大学生からわかりやすく聞いたことと人と直接触れ合っただけで情報を聞いたことがあげられていた。

また、手ごたえ度60%であるカード作りや、相手からカードをもらったことが、交流相手の存在を意識できる活動であり、子どもたちは楽しんでやっていたという理由があげられた。

もう1つの手ごたえ度60%にzoom会議の体験をあげた理由2点、

- ・「Zoomでは、自分たちの力でコミュニケーションをとったり、班のみんなと協力して言語という壁を乗り越えようとしたりする姿を見ることができました。クラスの子もたちが海外に興味を持ち、英語を使いコミュニケーションする意欲の向上ということで、手ごたえを感じました。」

- ・「ALT以外で外国の人と実際にコミュニケーションをとる機会がなく、貴重な経験になった

から。zoomでの交流や、カード交換などに対する子どもたちの関心が非常に高かったから。」

④ 国際交流実践後の教師の意識

表4 実践後の教師の思い (8項目)

項目	%
1 準備の負担感があった	78%
2 相手とのコミュニケーションをうまく取れた	55%
3 英語をもっと学んで話したいという思い	90%
4 世界についてもっと知りたい	95%
5 他国の文化・教育を知ることは大切	98%
6 自国の良さに気付けた	90%
7 自身の今後に役立つ	95%
8 児童にとって良い機会であった	95%

*4件法で、当てはまるを4点、どちらかという当てはまる3点、どちらかという当てはまらない2点、当てはまらないを1点として計算。満点は40点。合計点数を%で提示。

準備の負担感は、10名中8名が負担感を感じていた。準備として必要なものは、送付カードの準備、ベアの準備などがあるが、zoomでの交流内容についてはかなり負担感を感じているようである。(zoomの内容については後述)

台湾の先生とのコミュニケーションの評価については十分ではないが7名、十分とれたが3名であった。コミュニケーションはグループLINEで学級担任と台湾の先生との間で行う。LINEでのやり取りは自分の母国語で書き込み相手の言語に自動翻訳される。コミュニケーションが取れたと答えた教員は、英語専科と台湾に何度も訪問している教員とLINEでの交流が頻繁であった若手教員であった。初めて参加の教員9名中7名はコミュニケーションに困難さを感じていたようである。

その他の項目についてはおおむね肯定的であり、台湾との交流自体が教員の異文化理解や、自分の認識の変容につながったことを認めている。また、児童にとっても教員全員がよい体験であったことを認めている。

⑤ 国際交流・テディベアプロジェクトを通して、先生方の意識に変化はあったか？

表5 教員の国際交流の意識の変化の有無

項目	%
とてもあった	0%
あった	50%
どちらかというあった	40%
まったくなかった	10%

まったくなかったと答えた教員は1名で、これまでも台湾と交流を持っており今回での交流で特に変化はなかったという意味であった。意識の変化があった教員は90%であった。

○「あった」と答えた教員の理由 (抜粋)

・想像していた以上に簡単に交流することができた。始める前はpadletやmeet会議も不安が先立っていたが、やってみると楽しく繋がる部分が多く、児童も前向きに取り組めた。

・世界の広がりを感じられた。
・学校の文化の違いに気づくことができた。そのため、もっと英語の授業では、英語を話そうとするメンタルを育てることが大切なのではないかという意識になった。

・学生のみなさんの支えがあってこそその国際交流でしたが、これまでは、国を超えた交流は不可能に近いと思っていたので、実現できるのかと、教育の幅が広がった。

・担任の先生方も海外の文化や英語に興味を持つことができていた(英語専科より)

○「どちらかというあった」の教員の理由

・英語は苦手ですが、英語で交流することを面白いと思える瞬間が何度かあり、それが自分には初めての感覚だったので面白かった。

・実際に国際交流してみないと得られない学びがあると感じたから

・全校を巻き込んで、大々的にお知らせするという訳ではなかったため、自分たちの学年だけにとどまった活動になった印象があるため。

・台湾の先生とLINEでやり取りをしたが翻訳機能の日本語で十分な感じがした。zoomでは英語が必要だがLINEでは英語じゃなくても伝わるのがわかったのが新鮮だった。

以上のことから、

・国際交流のハードルは想像より低く、実践すると学びが大きい。また、児童だけでなく教員自身の意識変容も大きい。一方で、学校全体への広がりや英語使用の在り方には改善の余地があることがわかる。

⑥ 台湾とのzoomやテディベアプロジェクトなどに参加してよかったと思ったところは？(自身、児童への影響など)

○交流がもたらした主な学びと変化(児童)

・交流のハードルが低いと実感

PadletやMeetへの不安はあったが、実際は楽しくスムーズで児童も前向きに参加した。

・地域学習への動機づけが高まった

台湾に金沢を紹介する目的が明確になり、総合学習で「金沢を学ぶ必然性」が強まった。

・児童の主体的な学びが促進

ニューイヤーカー作成やZoom原稿準備を通して児童が自ら台湾の文化を調べ始めた。

・国際交流という特別な体験が児童の記憶に残った

台湾の小学生と直接話した経験や、泉野小での活動が「一生の思い出」になったという実感。

・世界の広がりを感じ、文化理解が深まった

台湾の食文化や贈り物の習慣など、具体的な文化の違いに触れた。

・日本文化を見直す機会にもなった

台湾との比較を通して、日本の良さを再認識する児童の姿が見られた。

○教員自身の意識・スキルの変化

- ・英語を使う場面が新鮮で楽しかった
LINEでの英語のやり取りや、Zoomでの即興的なコミュニケーションが刺激になった。
- ・英語を「使う」必然性を実感
海外の友達と話すために自然に英語を使う児童の姿が頼もしく感じられた。
- ・台湾への親しみや交流のしやすさの実感
台湾の気質を知っている教員からは「やりとりがとても楽しい」という声もあった。
- ・違いを楽しむ姿勢が育った
文化の違いを「面白い」と感じるよう声かけし、児童もそれを楽しんでいた。
- ・学生のサポートが大きな安心材料になった
星稜大学の学生のフォローが、交流を円滑に進める助けになった。

○全体として

- ・交流は想像以上に実現しやすく、児童の意欲、主体性、国際理解が大きく伸びたと思われる。また教員自身も英語使用や文化理解の面で新しい経験を得たと言える。

⑦今回の zoom 会議、テディベアプロジェクトの課題点は？

○主に指摘された課題

- ・英語でのコミュニケーションの難しさ
英語で意思疎通することが難しく、リアルタイムのやり取りがスムーズにいかない。
- ・交流の見通しを持ちにくい
過去事例や資料が少なく計画を立てにくいし、教育課程に位置付けて継続することにも難しさを感じている。

・機材、環境面の問題

Zoomで相手校の音質が悪く、内容が聞き取れないグループがあった。

Chromebookの音量が小さく、部屋の分け方やスピーカーの準備が必要だった。

- ・交流内容の効果に差がある
テディベアを使った活動は「なくても交流できた」「学びの深まりは感じにくかった」という声もあった。

・リアルタイム性の不足

Padletの更新頻度が双方で低く、もっと双方向のやり取りが増えると良いという意見。

・英語力や交流量の差

Zoomでは日本と台湾の英語力の差が大きく感じられた。台湾側からのメッセージ量や質にクラス間で差があり、対応が難しい。

・文化差への事前理解不足

台湾では食べ物を贈る文化が強く、日本にもたくさん送って来たので日本側が驚く場面があった。事前に確認をしておく必要がある。

・交流時期のズレ

学校・クラスによって交流時期がずれると、英語科の授業進度と合わず運営が難しくなる。

○教員側の負担感・依存度

- ・星稜大学の学生のサポートがなければ成立しない部分が多く、依存度の高さを課題として認識している。

- ・夜遅い時間に台湾の先生から連絡が来るなど、調整の難しさもあった。

⑧ 交流で負担が大きかったものは？

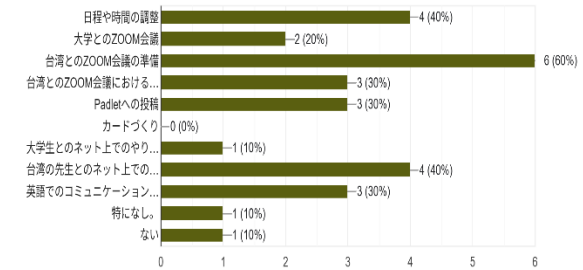


図3 教師として負担が大きかったもの（複数）

Zoom会議は各クラの小グループ単位でおこなうことが多く、その時の準備の負担感が大きかったようである。毎回の小グループzoomでは、学生も遠隔で入って、進行のサポートをしているが、英語の授業との連携が必要である。交流は相手がいる活動なので、日本だけの都合では進まない。そこに交渉の必要性があるが、その実務的な交渉は学生が肩代わりしていた。

⑨ 次年度年度も機会があれば国際交流を行なってみたいですか？

表6 次年度の希望

次年度の希望	%
やってみたい	20
条件がそろえばやってみたい	80%

条件がそろうとは、担当学年や同一学年の各担任の同意などであるが、その条件がそろえばやりたいというのが全体の意見であった。

4 研究のまとめと考察

今回の台湾との国際協働学習は体験した教員すべてがその価値を認めていた。一方で、言語・機材・文化・進度・運営体制など多方面に課題があり、継続的に実施するためには、事前資料の整備・機材環境の改善・文化理解の共有・学校間の調整が必要だと感じていることがわかった。

その中でも大学生の支援は大いに役立っており、感謝された。国際交流は、最初は支援ありきでも、その価値が理解された後は、様々な調整をした上で前向きに継続できることを望みたい。こどもたちにとってずっと忘れない体験になることは間違いないと確信している。

参考文献

- 1) JEARNのプロジェクト
- 2) ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら (第7版) 開発教育協会 2026

その他の実践編

ANNE FRANK Meet & Learn

～2025 年度パネル展開催～ 所属 JEARN 名前 高木洋子

ANNE FRANK の理念・理想・そして彼女の夢のことごとくを奪い去った戦争。第2次世界大戦後、日本の私達が現在味わっている平和な日常にあっても、世界の各地で起こる紛争や戦いの現実に向き合っ、戦争体験者でもある私が、この ANNE のパネル展を続けて 15 年となる。

キーワード パネル 34 枚 130 回 日本内 学校・大学など

1. はじめに

このパネル展は、オランダの ANNE FRANK House の協力により日本語・英語による 34 枚のパネルが、まず 2009 年 12 月に上智大学で開催され、その後、日本各地を巡り本年 2025 年に 130 回目の開催となったものである。

2. 目的と方法

2-1 目的

1933 年以降のファシズムの台頭、ユダヤ人に対する弾圧政策、そして数百万の犠牲者の一人アンネも命を失ったのである。大規模な破壊兵器による現代の社会に於ける戦争・紛争の中にあるからこそ、アンネの平和が実現するように継続する。

2-2 方法

1) 実施計画案

本プロジェクトは、コーディネーターへのパネル展開催申し込みにより、主催者・開催場所・開催期間などを決定。コーディネーターは、事前にポスターに使えるアンネの写真の紹介や事後報告書内容、パネル一式リスト、組立手順を伝える。

2) 内容項目

報告書は、英語版と日本語版があり、パネル展会場に於ける写真や生徒たちの感想文を含む。

3) 報告書の共有

報告書の提出・共有先は、次の 4 つである：

1. JEARN ML
2. JEARN Website 担当者
3. オランダ大使館東京
4. Stefan & Peter (アジア担当者)

3. 活動内容・研究内容

3-1 活動内容 I 129 回目の展示

○日時：2025 1 月 14 日～2 月 14 日

○場所：聖心女子学院

展示の様子は以下の URK を参照

<https://gcpej.iimdofree.com/link/annefrank/2025-26/>

3-2 活動内容 II 130 回目の展示

○日時：2026 年 1 月 22 日～2 月 20 日

○場所：不二聖心女子学院



写真 1 不二聖心女子学院での展示の様子

3-3 “The Legacy of Anne Frank” の筆者と面会

○日時：4 月 2 日

○場所：神戸にて



筆者 Ms. Gillian と面会。著書（英語版）を受領。本文中の Anne Frank in Japan には、私のパネル展示に関する活動の紹介が載せられていた。

写真 2 筆者 Ms. Gillian from UK

4. 成果と課題

○成果

パネル展単独ではなく、生徒たちによる関連ワークショップの開催など学校全体として取組まれている点。

○課題

残念ながら 2025 年度は 2 回の開催に留まり、アンネと生徒達との出会いが少なかった。今後の開催場所・年間開催数を増やす事が問われている。

国際協働学習 iEARN レポート

2026 年 6 月 1 日発行

出版元 NPO 法人 JEARN

<https://jean.jp/Journal/journal.html>

ISSN 2434-0049